

【別紙 1】

論文の内容の要旨

論文題目 下顎骨骨折術後アウトカムと体格指数、および要介護者の口腔機能維持と健康アウトカムの関連についての DPC データベースおよび介護データベースを用いた分析

氏 名 大野 幸子

医科では大規模レセプトデータベースを利用した臨床疫学研究が盛んであり、エビデンスの創出に大きく貢献している。一方、歯科診療行為にはエビデンスが限定的なものも多い。その背景として歯科診療の多くは診療所外来で行われており、大規模臨床研究の実施が困難であること、さらに、既存の診療情報データベースは医科情報に対して最適化されていることがあげられる。本研究は、それらの既存のデータベースに含まれる口腔外科関連疾患、及び歯科関連加算を用いて、歯科臨床疫学研究を実施した。各研究を詳述し、歯科臨床疫学研究における既存のレセプトデータベースの利点と限界について検討した。研究①では、医科の入院診療報酬データベースである DPC データベースを用いて、BMI と下顎骨骨折観血的整復術及びその予後に与える影響を分析し、過体重 ($BMI \geq 25 \text{kg/m}^2$) は在院日数の延長と関連していることが示唆された一方、BMI は術後合併症、麻酔時間、入院費用とは関連しなかった。研究②では、歯科医師による間接的介入である口腔機能維持管理が介護施設入所者の健康予後に与える効果を検討し、口腔機能維持管理を算定した施設は、算定していない施設と比較して、重大な病状、死亡、病院への入院、および介護費用の変化については、両群で差がないものの、自宅への退所が有意に増加していた。そのことから、歯科医師によって提供される口腔機能維持管理加算で算定される間接的な介入が、入所者の自宅退所と関連していることを示した。これらの一連の

研究により、大規模臨床データベースにより歯科あるいは口腔の健康状態と全身健康状態の関連の評価が可能であることを示した。今後、歯科特有の処置や疾患の予後、特に口腔内の状態をアウトカムとして評価する場合には、口腔内の詳細な臨床情報を含む歯科データベースを構築し、さらに症例を集積する必要がある。